2014年7月発行　大学新聞掲載記事

VOL.62

トップインタビュー

自分自身を見つめ、主体的に学ぶ力を育む

東洋学園大学 第5代学長 原田 規梭子

垣根を越えて学び合う「知のコミュニティ」を築く

1926年創立の東洋女子歯科医学専門学校を前身として、教員と学生の距離が近いキメ細かな教育体制を築いてきた東洋学園大学（東京都文京区）。時流をつかむ教育の実践のため、積極的に改革を推し進めている。世界を舞台に活躍できる力を育むべく、グローバル・コミュニケーション学部、現代経営学部、人間科学部が配置する全学科でグローバル化を視野に入れた教育を行っているのが大きな特長の一つだ。

2014年4月、新学長に就任した原田規梭子学長を訪ね、初年次教育の改革や真の国際人を養成するためのグローバル教育の取り組みについて語っていただいた。

原田 規梭子

はらだ・きさこ●明治大学大学院文学研究科修士課程修了。東洋女子短期大学学長、東洋学園大学副学長を経て2014年4月から現職。日本英文学会、現代演劇研究会所属。専門分野は、英米の演劇。

初年次教育で自己認識「自分とは何か」を考える

―学長に就任されて3カ月が経とうとしています。いまの率直なお気持ちをお聞かせください。

学生約2000人、教職員・非常勤の方を含めて約300人の責任を抱える立場になり、改めて身が引き締まる思いです。副学長の時から心がけてはいましたが、学園全体が俯瞰できるような視点を持つことをより意識するようになりました。

本学の学びの原点は「自彊不息」という言葉に集約されています。これは「自ら進んで日々努力しなさい」という意味で、学生に常に伝えています。

私はいまの日本の大学界そのものがこの言葉からずれてきているような気がしてなりません。大人が学生に寄り添うのは良いことなのだとは思いますが、迎合し過ぎてきたような印象を受けます。いま、日本の大学教育そのものが変わっていかないと、ワールドスタンダードにおよばないのではないかという危機感があります。本学に限らず、日本の学生が世界の学生と肩を並べていくためにも、主体的に学ぶことの必要性を感じています。

―主体的に学ぶ姿勢の醸成のため、改革に着手されているとうかがいました。

私が学長になってから、初年次教育の改善のためのプロジェクトを立ち上げました。例えば1年生全員が必修の初年次教育である「教養基礎演習」の改革では、「私はなぜここにいるのか、何をしていかなければならないのか」という自己認識の形成に注力していきます。これは、自己認識こそが学問の基本だと考えているからです。「私はどういう人間か」ということをしっかりと見つめることで「主体的に学ぶとはどういうことか」を考え、議論を行う中で批判と賛同ができるようになります。

プレゼンテーションやディスカッション、グループ学習などを通じて学生が自ら動き、積極的に参加できるような工夫やサポートを行います。教職員のみならず、上級生も教える側として参加する手厚い初年次教育を行うことで、「これが東洋学園の学びなんだ」と早期に自覚できるような環境づくりに努めていきます。この初年次教育は、将来設計を展望するキャリア教育にも一直線につながっていきます。

―さまざまな人々とのふれあいの中で主体的に学ぶ力を磨いていくのですね。

上級生と下級生が交流する「主体的に学ぶためのコミュニティ」を築き上げていきたい。上級生が下級生に教えることは双方にとって良い影響があります。物を教えること。机の上で勉強していて分かったつもりでも、誰かに教えてみて理解不足の部分が見えてくるものです。

また、教員だけではなく、職員にも学生に積極的に関わってもらいます。キャリア・コンサルタントの資格保有者やコーチングの知識が豊富な方など、多彩な経験や知識を持っている職員が少なくありません。そうした職員の力も活かし、大学としての知の循環を円滑にしていきたいと考えています。

時代と共に学生が持つ力も変わってきています。高校新卒者の1～2割程度が大学に進学していた頃と違い、半数が進学する時代となり、多様な学生が入学してきます。それぞれの学生に響く授業をするにはどうすれば良いのかを考えた時、教育の方法を教員側が謙虚な姿勢で見つめ直していくことが必要だと言えるでしょう。

―教壇に立たれていた原田学長だからこその視点が活かされていらっしゃいます。

実は副学長に就任した時、授業はやめるように言われていたのですが、学長に就任するまで教鞭をとり続けていました。学生に日々接していないと、学生がどう変化しているのかを肌で感じられないのは怖いですし、寂しいものです。学生がたびたび私の部屋に悩みを打ち明けに来たり、授業で心に響いたことを話し合うなど、学生との関わり合いが教育の醍醐味だと思います。その流れの中から、学生の反応や意見を吸い上げていくのです。

私自身、アンテナを高く広げ、感性を鋭くしていなければ、重要な決断もできなくなってしまいます。学生にも情報を察知する感度や感受性を持ってもらいたいと願っています。

―グローバルに力を発揮できる人材養成に期待が寄せられています。

これまで本学は先見の目を持ちながら、社会のニーズに応える教育を展開してきました。前身の東洋女子短期大学時代の1950年代から「これからは英語力が必要不可欠だ」と創始者はずっと唱えてきました。そうした歴史と伝統を受け継ぎ、グローバル化をより一層進めていくつもりです。

しかしいま、グローバル化はビジネスの世界で「世界と競争する、勝ち抜く」という競争意識のもと展開されていますが、真のグローバル化とはそういうものではないでしょう。人の心を理解できて、他国の文化を受け入れられるマインドを身につけることが「国際人を育てる」ということだと思います。

国際キャリアプログラムで真の国際人を養成する

―貴学のグローバル人材養成の取り組みである「国際キャリアプログラム」設置の経緯や特長をお話しください。

今年4月にスタートした国際キャリアプログラム（ICP＝International Career Program）は、私が以前英語教育開発センター長を務めていた時に導入したアルプス（ALPS＝Academic Learning and Professional Skills）という特別選抜クラスの成功が背景にあります。

ALPSは、1年次の成績優秀者から選抜された学生に2人のネイティブ教員がついて、よりハイレベルな英語力向上に取り組むプログラムです。7年前に開始して以来、TOEIC800～900点台のスコアを出すなど、英語力向上に成果を上げる学生を続々と輩出してきました。

常に「一人ひとりの学生のため」を想う原田学長の眼差しはとても穏やかだ

そしてICPは、ALPSをさらに発展させたもので、学生一人につき一人のチューターがつく徹底した少人数制教育のもと、実践的な英語力養成と異文化を受容できる人間力を養成します。教科科目を英語で学ぶCLIL（Content and Language Integrated Learning）を実施するなど、約85％の授業を英語で行います。また、英語圏の協定校へ学部レベルでの留学を1年間必修としています。その際の留学費用は、国内と留学時の授業料の差額を奨学金として支給しますので、経済的なサポート体制も万全に整えています。

英語教育に注力してきた本学は、英語力向上のためのメソッドが蓄積されています。現在、10人が本プログラムにチャレンジしていますが、いまのところTOEFLの点数はそこまで高くはありません。しかし、10人が団結して無遅刻無欠席で無我夢中になって授業に臨んでおり、「この学生たちはやり切れる」と確信しています。

―学生の潜在的な力を信じて指導されていらっしゃる。

昨年、ICPの説明会を開催したところ、英検3級すら持っていない高校生が訪ねてきました。話を聞く中で「どうしてもICPで学びたい」という気持ちになったそうです。隣にいた保護者は無理だと諭したそうなのですが、本人のやる気はすさまじく、説明会の次の月にはICP受験要件の英検準2級を取得してきました。その高校生はいま、ICPの学生として日々努力を重ねています。

若者が秘めたエネルギーは本当に素晴らしい。

いま、自分に自信が持てない学生が多いように思います。それは日本が「自信をなくすような教育」をしてきたから。誰しもが輝ける力を秘めています。教員の使命は学生の潜在能力を学生自身に気がつかせること。そのためには教員が学生を信じなければなりません。

耕すという意味を持つcultivateは、育むという意味も持っています。土を耕して種を撒き、水と栄養を与えると固い殻を破って出てくる――。学生という種は懸命に努力して芽を出すのです。もちろん栄養を与えなければいけませんが、それからは自らの力で太陽に向かって伸びていくのです。

教員ができることはそんなに多くはありません。学生を信じて方向性を導いてあげたら、彼ら・彼女らはきちんと栄養が摂れる方向に葉を伸ばしていきます。人間ですから、間違うこともたくさんあります。たとえ日陰に伸びてしまっても、苦労した経験は必ず栄養になるのだと声をかけていくことが大切なのではないでしょうか。

―高校の先生方にメッセージをお願いいたします。

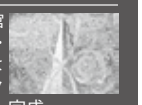
本学の特色である初年次教育とグローバル教育に、より一層力を注いでいきます。その延長線上で、一人ひとりに合ったグローバル教育を見つけてあげたいのです。

そして、高校生には受験勉強以外にも学ぶ楽しさがあることをぜひ知って欲しい。主体的に学び、学ぶことの楽しさを知り、お互いに学びあうコミュニティを全学的に作れるように改革を進めて参ります。これからの東洋学園にぜひご期待ください。

学校法人 東洋学園

歩み HISTORY

過去から、そして未来へ――

大正6年（1917年）	9月、前身・明華女子歯科医学講習所開校（1921年、専門学校令による旧制明華女子歯科医学専門学校として認可）
大正15年（1926年）	11月、歯科医師法による女子初の文部大臣指定校として旧制東洋女子歯科医学専門学校創立
昭和3年（1928年）	8月、ドイツ近代復興様式の校舎・寮竣工
昭和5年（1930年）	11月、栃木県上都賀郡永野村（現・鹿沼市）に槃澗学寮を設置（原形は明治5年築）
昭和16年（1941年）	5月、歯科医学の分野で初の女性主体による学会を挙行
昭和20年（1945年）	4月、第二次世界大戦の空襲により施設を焼失
昭和21年（1946年）	5月、千葉県千葉郡津田沼町（現・習志野市）に移転
昭和22年（1947年）	4月、第1回歯科医師国家試験の合格率が全国第2位となる。10月、旧制東洋高等学校（医学部進学課程）開校
昭和23年（1948年）	11月、東京・本郷に附属病院（校舎）を再建・復旧
昭和25年（1950年）	3月、東洋女子歯科医専、東洋高校閉校。5月、新制東洋女子短期大学（英語科）を開学
昭和36年（1961年）	2月、旧1号館竣工、建築家・今井兼次による「フェニックス・モザイク」完成 
昭和39年（1964年）	4月、コース制設定、LL施設を本格的に稼動開始
昭和42年（1967年）	9月、千葉県流山市に流山キャンパスを開設
昭和48年（1973年）	4月、専攻科を設置
昭和53年（1978年）	4月、学科名称を英語英文科に変更
昭和57年（1982年）	4月、流山キャンパスに欧米文化学科を設置
平成4年（1992年）	4月、東洋学園大学（人文学部英米言語学科、英米地域研究学科）開学
平成12年（2000年）	4月、人文学部コミュニケーション学科を設置
平成14年（2002年）	4月、人文学部人間科学科、現代経営学部現代経営学科を設置
平成16年（2004年）	4月、人文学部の既存3学科を国際コミュニケーション学科に再編
平成18年（2006年）	3月、東洋女子短期大学第55回卒業式（最終）
平成19年（2007年）	3月、本郷キャンパス新1号館竣工
平成20年（2008年）	4月、東洋学園大学大学院現代経営研究科現代経営専攻修士課程を設置
平成25年（2013年）	4月、人文学部をグローバル・コミュニケーション学部、人間科学部に再編
平成26年（2014年）	4月、国際キャリアプログラム始動